

日本の小型鯨類調査研究についての進捗報告  
 2014年4月から2015年3月  
 (統計データは2014暦年)

とりまとめ

木白俊哉

独立行政法人水産総合研究センター国際水産資源研究所

〒236-8648 神奈川県横浜市金沢区福浦 2-12-4

本報告は、2014年（暦年）の小型鯨類漁業の捕獲統計及び2014年度（2014年4月から2015年3月まで）に水産総合研究センター（以下、水研センター）国際水産資源研究所（以下、国際水研）及び農林水産省水産庁（以下、水産庁）が、他機関と協力して実施した調査研究を取り纏めたものであり、第66a回国際捕鯨委員会科学委員会年次会合（以下、66a/IWC/SC）に提出した“National Progress reports” <https://portal.iwc.int/progressreportspublic> に含まれていない小型鯨類についての情報を示すものである。我が国は、小型鯨類の管理は国際捕鯨取締条約の対象外としている。

### 1.対象とした種および系群

標準和名	学名	海域/系群	関係する項目
イシイルカ	<i>Phocoenoides dalli</i>	太平洋沿岸, オホーツク海, 日本海	2.1.1, 2.2, 5.1, 5.2, 5.3, 8.1
スナメリ	<i>Neophocaena phocaenoides</i>	日本沿岸	2.1.1, 2.2, 5.2.2, 5.3, 8.1, 8.2
カマイルカ	<i>Lagenorhynchus obliquidens</i>	太平洋沿岸, 日本海	2.1.1, 2.1.2, 3.1.3, 4.1, 4.2, 5.1, 5.2.2, 5.3, 8.2
スジイルカ	<i>Stenella coeruleoalba</i>	太平洋沿岸	2.1.1, 4.1, 4.2, 5.1, 5.2, 5.3
マダライルカ	<i>Stenella attenuata</i>	太平洋沿岸	2.1.1, 4.1, 4.2, 5.1
ハンドウイルカ	<i>Tursiops truncatus</i>	太平洋沿岸, 東シナ海	2.1.1, 3.1, 4.1, 4.2, 5.1-3
ハナゴンドウ	<i>Grampus griseus</i>	太平洋沿岸	2.1.1, 4.2, 5.1, 5.3
コビレゴンドウ	<i>Globicephala macrorhynchus</i>	太平洋沿岸, 東シナ海	2.1.1, 4.2, 4.4, 5.1, 5.3
オキゴンドウ	<i>Pseudorca crassidens</i>	太平洋沿岸	2.1.1, 4.1, 4.2, 5.1
シャチ	<i>Orcinus orca</i>	日本沿岸	2.1.1, 2.1.2, 8.1
ツチクジラ	<i>Berardius bairdii</i>	太平洋沿岸, オホーツク海, 日本海	2.1.1, 2.1.2, 4.2, 4.4, 5.1, 5.3, 8.1
その他の種類	-	日本沿岸	2.1.1, 4.1, 5.2, 5.3

## 2.目視データ

## 2.1 フィールドワーク

## 2.1.1 目視調査

国際水研と水産庁は、北太平洋において調査船による目視調査航海を計 5 回実施した。使用した全ての調査船は専用の鯨類観察台（トップバレル）を装備している。これらの航海において、以下の小型鯨類を発見記録した。なお、大型鯨類の発見については、66a/IWC/SC に提出した National Progress report を参照されたい。

表 1. 2014 年度（2014 年 4 月から 2015 年 3 月まで）に調査船目視調査で得られた小型鯨類の発見

鯨種	調査期間	海域	発見群数	担当機関
イシイルカ型 イシイルカ	12/08/14-31/08/14	オホーツク海	29	国際水研
	12/08/14-15/08/14		2	
	1/09/14-12/09/14	日本海	1	
	1/09/14-8/09/14	西部北太平洋	19	
リクゼンイルカ型 イシイルカ	12/08/14-31/08/14	オホーツク海	6	
	5/06/14-10/07/14	西部北太平洋	16	
	1/09/14-8/09/14		8	
ネズミイルカ	1/09/14-8/09/14	西部北太平洋	1	
カマイルカ	12/08/14-31/08/14	オホーツク海	48	
	5/06/14-10/07/14	西部北太平洋	49	
	1/09/14-8/09/14		19	
スジイルカ	5/06/14-10/07/14	西部北太平洋	1	
	6/06/14-9/07/14		12	
マダライルカ	14/05/14-2/06/14	西部北太平洋	2	
	5/06/14-10/07/14		6	
	6/06/14-9/07/14		15	
マイルカ	6/06/14-9/07/14	西部北太平洋	2	
シワハイルカ	5/06/14-10/07/14	西部北太平洋	3	
	6/06/14-9/07/14		1	
サラワクイルカ	6/06/14-9/07/14	西部北太平洋	4	
ハンドウイルカ	14/05/14-2/06/14	西部北太平洋	9	
	5/06/14-10/07/14		6	
シャチ	12/08/14-31/08/14	オホーツク海	1	
	12/08/14-15/08/14		2	

表 1. 続く

表 1. 続き

鯨種	調査期間	海域	発見群数	担当機関
北方型コビレゴンドウ (タッパナガ)	5/06/14-10/07/14	西部北太平洋	1	国際水研
	1/09/14-8/09/14		1	
	13/09/14-16/09/14		4	
南方型コビレゴンドウ (マゴンドウ)	14/05/14-2/06/14	西部北太平洋	4	
	5/06/14-10/07/14		3	
	6/06/14-9/07/14		7	
オキゴンドウ	5/06/14-10/07/14	西部北太平洋	1	
	6/06/14-9/07/14		3	
ハナゴンドウ	14/05/14-2/06/14	西部北太平洋	21	
	5/06/14-10/07/14		73	
	6/06/14-9/07/14		6	
	1/09/14-8/09/14		6	
カズハゴンドウ	14/05/14-2/06/14	西部北太平洋	4	
	5/06/14-10/07/14		2	
	6/06/14-9/07/14		9	
ユメゴンドウ	14/05/14-2/06/14	西部北太平洋	1	
ツチクジラ	12/08/14-31/08/14	オホーツク海	4	
	1/09/14-12/09/14	日本海	16	
	5/06/14-10/07/14	西部北太平洋	26	
	1/09/14-8/09/14		1	
アカボウクジラ	5/06/14-10/07/14	西部北太平洋	1	
オウギハクジラ	5/06/14-10/07/14	西部北太平洋	2	
タイヘイヨウアカボウ モドキ	6/06/14-9/07/14	西部北太平洋	1	
コマッコウ	14/05/14-2/06/14	西部北太平洋	3	
	5/06/14-10/07/14		1	

上記発見は以下の 5 航海でなされた。

- 1) 本州南方域小型鯨類目視調査、俊鷹丸、2014 年 5 月 14 日から 6 月 2 日
- 2) いるか類分布生態調査 1、第 8 開洋丸、2014 年 6 月 5 日から 7 月 10 日
- 3) いるか類分布生態調査 2、第 2 昭南丸、2014 年 6 月 6 日から 7 月 9 日
- 4) オホーツク海イシイルカ目視調査、俊鷹丸、2014 年 8 月 7 日から 9 月 16 日
- 5) オホーツク海ミンククジラ分布生態調査、第 2 昭南丸、2014 年 8 月 8 日～9 月 8 日

この他に、国際水研は、土佐湾ホエールウォッチング推進協議会(以下、協議会)の協力のもとに、協議会に所属する 6 隻のホエールウォッチング船を用い、2014 年 7 月に土佐湾南西部沿岸にて、ニタリクジラ

の目視調査を実施した。これらの船（5-10トン）は、専用の観察台（トップバレル）を持たないため、上表に含めていないが、7月に3日間調査が行われ、木白俊哉(国際水研)と5名の補助調査員および延べ6名の漁業者（協議会メンバー）が乗船調査員を務め、ニタリクジラに加えて、ハセイルカ4群530頭の発見を記録した。

また、国際水研は、沿岸域における鯨類の分布・発見情報を得るため2件の航空目視調査を実施した。2014年9月23日と26日に釧路沖海域において調査を実施した。宮下富夫・木白俊哉・村瀬弘人(国際水研)が、バブルウインドウを装着した双発小型飛行機に搭乗し、海上を高度700フィート、速度135ノットで移動しつつ探索した。943海里を飛行する間にイシイルカ6群15頭と種不明イルカ類(カマイルカらしい)2群15頭を発見した。2014年7月16-17日に、伊勢湾・三河湾においてスナメリに対する航空目視調査を実施した。吉田英可（国際水研）・古田正美（鳥羽水族館）・小川奈津子（東京海洋大）が、単発高持翼のセスナ機に搭乗し、海上を高度500フィート、速度80ノットで移動しつつ探索した。330海里を飛行する間にスナメリを117群203頭発見した。他の鯨類の発見はなかった。

### 2.1.2 目視調査以外の発見データ

小型捕鯨業といるか漁業の操業において、漁場内における捕獲対象種を主とした鯨類の発見情報を、操業船から収集した(ツチクジラ、マゴンドウ、オキゴンドウ、マゴンドウ、ハナゴンドウ、スジイルカ、マダライルカ、カマイルカなど)。

また、2014年9月に実施された JARPNII 釧路沖鯨類捕獲調査において、ツチクジラ2群4頭、シャチ16群80頭の発見を記録した。

## 2.2 解析および技術開発

金治佑(国際水研)は、過去の目視データを用いて、小型ハクジラ類の空間分布推定の作業を進めた。また金治、宮下、吉田、木白は長期収集された目視調査データを用いて、オホーツク海中西部のイシイルカ型およびリクゼンイルカ型イシイルカの資源量推定を行った。

吉田と小川は、2014年夏季に実施された航空目視調査データを用い、伊勢湾・三河湾におけるスナメリの資源量推定値を更新した。

## 3. 標識データ

### 3.1 フィールドワーク

#### 3.1.1 自然標識データ

自然標識は実施されなかった。

#### 3.1.2 人工標識データ

国際水研と太地町立くじらの博物館との協力のもと、2014年9月28日から2015年2月19日にかけて、太地追い込み漁業で捕獲されたハンドウイルカ21個体、マゴンドウ6個体の背鰭にプラスチック製の簡易タグを装着し放流を行った。

## 3.1.3 テレメトリーデータ

南川真吾(国際水研)は、6月に西部北太平洋(日本沿岸)で2頭のカマイルカに、ポップアップアーカイバルトランスミッティング(PAT)タグ(miniPAT, Wildlife Computers製)を装着した。タグの装着期間はそれぞれ6日間、13日間であった。このうち一本を温度、深度、照度のアーカイバルデータ取得のために回収した。また、南川は石川県の二つの定置網漁業者に依頼して、混獲されたイルカの背びれへのアルゴス送信機タグ(AM-S281A, Wildlife Computers)の装着を試みた。その結果、2014年4月から2015年3月までの間に3頭のカマイルカ、1頭のハンドウイルカにタグが装着された。

表 2.1. 2014年度(2014年4月から2015年3月まで)に得られた小型鯨類のPATタグデータ。

鯨種	タグのタイプ	装着数	離脱浮上数	回収数	担当機関
カマイルカ	miniPAT	2	2	1	国際水研

表 2.2. 2014年度(2014年4月から2015年3月まで)に得られた小型鯨類のテレメトリーデータ。

鯨種	タグのタイプ	装着数	最長追跡期間	担当機関
カマイルカ	AM-S281A	3	138日	国際水研
ハンドウイルカ	AM-S281A	1	1日	国際水研

## 3.2 解析および技術開発

南川は、日本周辺のカマイルカの季節移動の把握を目的として、2010年から2014年にポップアップタグを装着して得られた28個体と、アルゴス送信機タグによる3個体の移動追跡データを深度10mの水温分布データと照合した。

## 4.組織/生物学的試料の収集

## 4.1 バイオプシー標本

調査船による3つの目視調査(本州南方域小型鯨類目視調査、いるか類分布生態調査1・同2)中に、スジイルカ13片、マダライルカ12片、ハンドウイルカ3片、マイルカ2片、カマイルカ2片、サラワクイルカ1片、カズハゴンドウ1片、オキゴンドウ1片、種不明イルカ類2片の計37片のバイオプシー標本を収集した。

表 3. 2014年度(2014年4月から2015年3月まで)に得られた小型鯨類のバイオプシー標本

鯨種	海域/系群	採取 試料数	保管 (Y/N)	分析 試料数	保管 試料数	担当機関
スジイルカ	西部北太平洋	13	Y	0	13	国際水研
マダライルカ	東シナ海	2	Y	2	2	国際水研
	西部北太平洋	10	Y	0	10	国際水研

ハンドウイルカ	西部北太平洋	3	Y	3	3	国際水研
マイルカ	西部北太平洋	2	Y	0	2	国際水研
カマイルカ	西部北太平洋	2	Y	0	2	国際水研
サラワクイルカ	西部北太平洋	1	Y	1	1	国際水研
カズハゴンドウ	西部北太平洋	1	Y	0	1	国際水研
オキゴンドウ	西部北太平洋	1	Y	0	1	国際水研
種不明イルカ類	西部北太平洋	2	Y	0	2	国際水研

#### 4.2 漁獲個体又は混獲個体からの標本

2014年度（2014年4月から2015年3月まで）に得られた小型鯨類の漁獲個体からの標本を表4に示す。

小型捕鯨業におけるツチクジラの当該期間の捕獲枠は、70頭（昨年捕獲枠に満たなかった太平洋系群4頭のキャリーオーバーを含む）であり、実操業期間は、日本海側沿岸で函館を基地として5月25日から6月26日まで、太平洋側沿岸で和田浦を基地とし6月20日から8月20日まで、鮎川を基地とし6月20日から8月26日まで、オホーツク海側沿岸で網走を基地とし7月4日から8月14日および10月4日から10月5日までであった。計70頭（函館沖10頭、網走沖4頭、太平洋沿岸沖56頭）が、5隻の捕鯨船（正和丸、第8幸栄丸、第28大勝丸、第7勝丸、第51純友丸）によって捕獲された。全捕獲個体について、5名の調査員が、生物調査と試料採取を行なった。

北方型コビレゴンドウ（タツパナガ）の捕獲枠は36頭であり鮎川を基地とした2隻の捕鯨船（第8幸栄丸、第28大勝丸）に対しツチクジラの操業期間中に捕獲が許可されたが捕獲はなかった。

南方型コビレゴンドウ（マゴンドウ）についての小型捕鯨の捕獲枠も36頭であり、5月1日から8月22日まで操業された。この間に、正和丸が太地で2頭、第51純友丸が和田浦で1頭を捕獲した。また、太地沖のマゴンドウの操業期間中に、オキゴンドウ20頭の捕獲枠も設定され、正和丸によって3頭が捕獲された。これらも全て、調査員による生物調査と試料採取が行われた。

また、国際水研との契約に基づき、東海大学が食性研究のため、太地の小型捕鯨および突きん棒漁業で捕獲されたマゴンドウ2頭、オキゴンドウ3頭、ハナゴンドウ6頭、ハンドウイルカ11頭、スジイルカ11頭から胃内容物の採取を行った。

太地の追い込み漁業については、2014年11月11日から12月24日および2015年1月6日から1月30日までの間、延べ7名の調査員が、生活史と系群の研究に用いる試料の採取を目的に、この間に水揚げされた、マゴンドウ25頭、スジイルカ345頭、ハンドウイルカ19頭、ハナゴンドウ96頭、マダライルカ53頭、カマイルカ1頭の調査を行った。

沖縄県庁は、漁業管理の一環として、2014年4月から2015年3月までに突きん棒漁業（石弓漁業）

で捕獲されたマゴンドウとハンドウイルカについて、漁業者から歯と表皮標本を収集した。これらの試料は、年齢査定と系群分析のため国際水研に送付される予定である。

混獲された小型鯨類からの試料採取は、2014年度（2014年4月から2015年3月まで）には、実施されなかった。

表 4. 2014年度（2014年4月から2015年3月まで）に得られた小型鯨類の漁獲試料

鯨種	海域	標本の種類	採取頭数	保管 (Y/N)	担当機関
ツチクジラ	西部北太平洋	To, Ma, O, U, Te, E, V, Sk, and St	56	Y	国際水研
	オホーツク海	To, Ma, O, U, Te, E, V, and Sk	4	Y	
	日本海	To, Ma, O, U, Te, E, V, and Sk	10	Y	
南方型コビレゴンドウ (マゴンドウ)	西部北太平洋	To, Ma, O, U, Te, E, V, Sk, and St	28	Y	
オキゴンドウ	西部北太平洋	To, Ma, O, U, Te, E, V, Sk, and St	3	Y	
ハナゴンドウ	西部北太平洋	To, Ma, O, U, Te, sk, and St	96	Y	
ハンドウイルカ	西部北太平洋	To, Ma, O, U, Te, sk, and St	19	Y	
スジイルカ	西部北太平洋	To, Ma, O, U, Te, sk, and St	345	Y	
マダライルカ	西部北太平洋	To, Ma, O, U, Te, and Sk	53	Y	
カマイルカ	西部北太平洋	To, O, and Sk	1	Y	

E: 精巣上体, Ma: 乳腺, O: 卵巣, Sk: 皮膚, St: 胃内容物, Te: 精巣, To: 下顎歯, U: 子宮内膜, V: 脊椎骨骨端板.

#### 4.3 座礁・漂着個体からの標本

座礁・漂着した小型鯨類からの試料採取は、2014年度（2014年4月から2015年3月まで）には実施されなかった。

#### 4.4 解析および技術開発

木白と石田梢(東京海洋大学)は、太平洋沿岸の小型捕鯨で捕獲されたツチクジラの歯を処理分析し、年齢査定標本作製における凍結切片法の応用に向けた技術開発を継続した。

木白は、性成熟判定のため、小型捕鯨および突棒漁業で捕獲されたもの計 132 個体（ツチクジラ、マゴンドウ、オキゴンドウ、ハンドウイルカ、ハナゴンドウ）の卵巣標本および、156 個体（ツチクジラ、マゴンドウ、オキゴンドウ、ハンドウイルカ、スジイルカ、マダライルカ）の精巣組織標本の分析を行った。

また、肉体成熟判定のため、小型捕鯨で捕獲されたツチクジラ 284 個体、マゴンドウ 20 個体、オキゴンドウ 2 個体の脊椎骨標本を分析した。

前田ひかり(国際水研)は、沖縄の突きん棒漁業および太地の追い込み漁業で得られたもの計 32 個体(マゴンドウ)の歯牙を用いて年齢査定用標本を作製した。

吉田は、日本周辺におけるカマイルカの系群構造研究を進展させるため、バイオブシー等で得られた計 179 個体の mtDNA 塩基配列を解読し解析に加えた。また、日本沿岸域の小型鯨類の系群構造解明に備え、バイオブシーや漁業で得られた試料 320 検体について塩基配列を解読した。

大泉宏(東海大学)は、太地において小型捕鯨と突きん棒漁業で捕獲される小型ハクジラ類の食性研究を継続した。2014 年 5 月に採集されたマゴンドウ 2 頭、オキゴンドウ 3 頭、ハナゴンドウ 6 頭、ハンドウイルカ 11 頭、スジイルカ 11 頭の胃内容物分析を行った。これらの採集標本数については 4.2 項も参照されたい。

金治は、食性解析を目的に、調査船による小型鯨類数種のバイオブシー標本から炭素・窒素安定同位体比の分析を行った。

## 5. 小型鯨類の統計

### 5.1 暦年(2014 年 1-12 月)の捕獲統計

小型捕鯨業の対象種、漁期、捕鯨船、捕獲枠および実際の捕獲頭数は 4.2 項に示した通りである。

いるか漁業については、1996 年より、イシイルカを対象とした漁業について 8 月 1 日に始まり翌年 7 月 31 日終わる管理期間、他の鯨種については 10 月 1 日に始まり翌年 9 月 30 日に終わる管理期間が設定されている。また和歌山県の漁業については、9 月 1 日に始まり翌年 8 月 31 日に終わる管理期間となっている。一方、捕獲統計は、従来同様、国際捕鯨委員会のプログレスリポートガイドラインに則り、1 月 1 日から 12 月 31 日までの暦年集計となっている。このため、一見、暦年の捕獲総数が、捕獲枠を超過するケースも生じ得るが、上述の水産庁による管理期間中の捕獲総数は、同期間に対して設定された捕獲枠内に留まっている。都道府県別、漁業種別の暦年捕獲統計を表 5 に示す。これらのデータは、各都道府県庁の報告に基づき、水産庁国際課によって収集されたものである。

2014/15 年漁期の、いるか漁業の捕獲枠は、前漁期から変更され、イシイルカ型イシイルカ 6,524 頭、リクゼンイルカ型イシイルカ 6,404 頭、ハナゴンドウ 478 頭、ハンドウイルカ 615 頭、マダライルカ 560 頭、スジイルカ 580 頭、マゴンドウ 185 頭であった。なお、オキゴンドウ(100 頭)とカマイルカ(360 頭)の捕獲枠については 2007/08 漁期以降、変更はない。

2014 年(暦年)の県別の操業許可期間は以下の通りである。いるか突きん棒漁業は、沖縄県で 9 ヶ月間(1 月 1 日から 8 月 31 日まで及び 12 月 1-31 日)、和歌山県で 8 ヶ月間(1 月 1 日から 8 月 31 日)、青森県、岩手県、宮城県、千葉県で 6 ヶ月間(1 月 1 日から 4 月 30 日及び 11 月 1 日から 12 月 31 日)、北海道で 4.5 ヶ月間(5 月 1 日から 6 月 15 日及び 8 月 1 日から 10 月 31 日)。追い込み漁業の操業許可期間は、和歌山県で 9 ヶ月間(1 月 1 日から 5 月 31 日まで及び 9 月 1 日から 12 月 31 日)、静岡県で 7 カ月間(1 月 1 日から 3 月 31 日まで及び 9 月 1 日から 12 月 31 日)であった。



表 5. 2014 年（暦年）の小型鯨類捕獲統計.

鯨種	漁業種	都道府県 <sup>1)</sup>	頭数 <sup>2)</sup>
ツチクジラ	小型捕鯨	北海道	14
		宮城	26
		千葉	30
イシイルカ型 イシイルカ	突きん棒	岩手 <sup>3)</sup>	14
		宮城	2
リクゼンイルカ型 イシイルカ		岩手	1,588
		宮城	32
カマイルカ	追い込み	和歌山	5(4)
スジイルカ	突きん棒	和歌山	63
	追い込み		367
マダライルカ	突きん棒	和歌山	18
	追い込み		145(35)
ハンドウイルカ	突きん棒	和歌山	35
	追い込み		172(78)
ハナゴンドウ	突きん棒	和歌山	103
	追い込み		260(7)
南方型コビレゴンドウ (マゴンドウ)	小型捕鯨	和歌山	2
		千葉	1
	追い込み	和歌山	41(2)
	突きん棒	沖縄	18
オキゴンドウ	小型捕鯨	和歌山	3

1) 小型捕鯨と追い込みの捕獲は水揚げ地ごとに記録。突きん棒の捕獲は船籍地ごとに記録。

2) 小型捕鯨の統計は調査員および捕鯨業者の報告に基づく。他の漁業の統計は、都道府県から水産庁への報告に基づき、それらは水揚げ伝票の集計（北海道と岩手県の突きん棒）ないし、個々の漁業者あるいは漁業協同組合からの報告の集計である。カッコ内は生体捕獲（内訳）を示す。

3) 北海道沿岸で捕獲された突きん棒の捕獲数の一部は、漁業者によって正肉として水揚げされ、1 頭当たり 50kg とする比率を用いて、道県によってイシイルカ型イシイルカの頭数に換算されたものである（石川ら 1990）。

## 5.2 暦年（2014 年 1-12 月）の非自然死亡

### 5.2.1 船舶との衝突

小型鯨類と船舶の衝突事例の情報収集は行わなかった。

### 5.2.2 漁業による混獲

暦年(2014 年 1-12 月)の、我が国漁業による小型鯨類の混獲死亡総数の暫定値を表 6 に示す。鯨種と頭数は都道府県から水産庁に報告されたものであり、それらは個々の漁業者ないし漁業協同組合からの報告に

基づく。

表 6. 2014 年（暦年）の小型鯨類混獲統計

鯨種	頭数	都道府県 <sup>1)</sup>	状態 <sup>2)</sup>	漁具	漁獲対象種	連絡先
イシイルカ型	6	北海道	K	定置網	不明	水産庁
イシイルカ	3		K	刺し網		
ネズミイルカ	1	北海道	A	定置網		
	2		K	刺し網		
	5		K	不明		
	1		R			
スナメリ	8	三重	D	刺し網		
	1	広島	K			
	1	岡山	K	定置網		
	1	山口	R	刺し網		
	1	香川	R	定置網		
	3	長崎	K			
	3		K			
カマイルカ	1	青森	D	刺し網		
	2	静岡	D	定置網		
	1		A			
スジイルカ	1	徳島	K			
ハンドウイルカ	1	岩手	D			
	1	福岡	A			
種不明鯨類	1	香川	R		流し網	

1) 漁具の設置された都道府県ごとに記録

2) 状態: A = 生存(水族館), D = 死亡(廃棄, 埋設等), K = 死亡(販売ないし標本保管), R = 生存(放流)

### 5.3 座礁・漂着した小型鯨類

暦年(2014年1-12月)の、我が国における小型鯨類の座礁漂着頭数の暫定値を表7に示す。鯨種と頭数は都道府県から水産庁に報告されたものであり、それらは個々の漁業者、漁業協同組合および一般からの報告に基づく。なお、表中の内死亡頭数は、座礁漂着で死亡したと報告されたものの数である。

表 7. 2014年(暦年)の小型鯨類座礁漂着統計

鯨種	頭数	内死亡頭数	連絡先
イシイルカ型イシイルカ	12	12	水産庁
ネズミイルカ	3	3	
スナメリ	133	130	
カマイルカ	15	15	
スジイルカ	5	5	
マイルカ	2	2	
ハセイルカ	1	1	
ハンドウイルカ	2	2	
ミナミハンドウイルカ	2	2	
シワハイルカ	1	1	
サワラクイルカ	1	1	
ハナゴンドウ	4	4	
カズハゴンドウ	3	3	
ツチクジラ	4	4	
アカボウクジラ	4	4	
オウギハクジラ	3	3	
イチョウハクジラ	1	1	
コブハクジラ	1	1	
コマッコウ	8	7	
種不明鯨類	20	20	

この他、日本鯨類研究所(104-0055 東京都中央区豊海 4-5)および国立科学博物館(305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1)も自主的に座礁漂着に関連した情報を収集している。

### 5.4 過去の統計

過去の統計の修正はない。

## 6. 小型鯨類に関するその他の研究分析

対象期間中、該当機関によって上記以外の小型鯨類研究はなされていない。

## 7.引用文献

石川創、藤瀬良弘、斎野重夫、銭谷亮子 1990. III. オホーツク海及び三陸沖海域での突きん棒船乗船調査. p53-78. 平成元年度日本周辺イルカ生物調査報告書. 78pp. 財団法人日本鯨類研究所.

## 8.論文公表

### 8.1 公表済みあるいは印刷中の論文

Kanaji, Y., Okazaki, M., Kishiro, T. and Miyashita, T. 2015. Estimation of habitat suitability for the southern form of the short-finned pilot whale (*Globicephala macrorhynchus*) in the North Pacific. Fisheries Oceanography 24: 14–25.

金治 佑・岡崎 誠 2015. 鯨類を対象とした生息地モデリング. 海洋と生物 36(5): 453–460.

金治 佑・宮下富夫 2015. シヤチ. In 橋本有紀子編 国際漁業資源の現況. 水産庁・水産総合研究センター [http://kokushi.job.affrc.go.jp/H26/H26\\_54.pdf](http://kokushi.job.affrc.go.jp/H26/H26_54.pdf). 2pp.

木白俊哉 2014. 日本における小型鯨類の漁業資源管理-参考として. 海洋と生物 36(2):193-200.

木白俊哉 2015. ツチクジラ 太平洋・日本海・オホーツク海. In 橋本有紀子編 国際漁業資源の現況. 水産庁・水産総合研究センター [http://kokushi.job.affrc.go.jp/H26/H26\\_47.pdf](http://kokushi.job.affrc.go.jp/H26/H26_47.pdf). 5pp.

木白俊哉 2015. 小型鯨類の漁業と資源調査(総説). In 橋本有紀子編 国際漁業資源の現況. 水産庁・水産総合研究センター [http://kokushi.job.affrc.go.jp/H26/H26\\_45.pdf](http://kokushi.job.affrc.go.jp/H26/H26_45.pdf). 4pp.

南川真吾 2014. ツチクジラの潜水行動. 勇魚 61: 25-30

宮下富夫 2015. イシイルカ. In 橋本有紀子編 国際漁業資源の現況. 水産庁・水産総合研究センター [http://kokushi.job.affrc.go.jp/H26/H26\\_46.pdf](http://kokushi.job.affrc.go.jp/H26/H26_46.pdf). 5pp.

小川奈津子, 吉田英可 2014. 日本におけるスナメリの個体数推定. 海洋と生物 36(2):182-190.

吉田英可 2015. スナメリ. In 橋本有紀子編 国際漁業資源の現況. 水産庁・水産総合研究センター [http://kokushi.job.affrc.go.jp/H26/H26\\_53.pdf](http://kokushi.job.affrc.go.jp/H26/H26_53.pdf). 5pp.

吉田英可, 立川利幸, 岩田知彦 2014. 日本におけるスナメリの系群構造 -系群と分布に関する3つの話題-. 海洋と生物 36(2):176-182.

### 8.2 未印刷の発表など

南川真吾 2014. アルゴスポップアップタグの利用〜と、洋上でのポップアップタグ回収. 第10回バイオロギング研究会シンポジウム 函館市10月

南川真吾 2014. 2014年度小型鯨類の目視調査結果について. 富戸漁期前研修会 伊東市 8月

南川真吾・木白俊哉・岩崎俊秀 2015. PAT タグ及び衛星標識による日本周辺のカマイルカの移動追跡. 平成 27 年度日本水産学会春季大会講演要旨集 p213.

小川奈津子・吉田英可・古田正美・加藤秀弘 2014. 伊勢湾・三河湾のスナメリの生息数-2014年夏季航空目視調査の結果- 平成 27 年度日本水産学会春季大会講演要旨集, 39p.

吉田英可・小川奈津子・古田正美・吉岡基・加藤秀弘 2014. 伊勢湾・三河湾におけるスナメリの生息状況 平成27年度日本水産学会春季大会講演要旨集, 208p.

吉田英可 2014. 日本周辺、特に瀬戸内海におけるスナメリの生息状況 -飛行機目視調査の結果から- 須磨海浜水族園 瀬戸内海の小さなクジラ スナメリを考えるシンポジウム 神戸市12月